

『関ヶ原軍記大全』の構造と主題

小野寺 光

—

『関ヶ原軍記大全』は、関ヶ原の戦いを描いた実録体小説である。その正確な成立年次は不明ながら、現存諸本の序文から、田丸常山の作と知られる。内容は、豊臣秀吉の発病・死去に端を発し、石田三成の謀略、および、関ヶ原の戦いの種々相を詳しく描き出したあと、徳川秀忠の將軍宣下による泰平の時代の到来で終わる。大部な読みものであるが、本書中で活躍する石田三成は、近年、中野等氏『石田三成伝』^①が是正の必要性を主張したような「神君」家康に刃向かった人物」そのものであり、史実としての関ヶ原の戦いからはほど遠い。

現代においても、歴史上の事件、人物を題材にした作品は、往々にしてその真偽性が議論される。菊池庸介氏が指摘するように^②、「読みものの体裁をとった記録」としての実録体小説も、成立当時から、その中に含まれる「虚」をどう受け止め、評価するかが問われてきた。実在の事件や人物という「実」の中に混ぜられていることが、「虚」の扱い方を複雑にしているのである。

さて、日本古典籍総合目録データベースによれば、『関ヶ原軍記

大全』は国立公文書館内閣文庫、宮内庁書陵部、東京国立博物館、早稲田大学、岐阜大学ほか、全国に二六本の写本が存在する。本来であれば諸本調査と本文比較が必要であるが、『関ヶ原軍記大全』を文学作品として読むことを重視し、諸本の問題にはあえて立ち入らず、国立公文書館内閣文庫所蔵の昌平坂学問所旧蔵本を底本に選んで読み進めることとする。内閣文庫蔵昌平坂学問所旧蔵本（以下「昌平坂学問所旧蔵本」と呼ぶ）の書誌は以下の通りである。

写本。天保六年写。袋綴じ本一六冊。三二卷内題「関ヶ原軍記大全 卷之壹」。外題箋「関ヶ原軍記 一」。洪印刷毛目表紙。一首二行書。本文一〇行。縦二六・八糎、横一八・七糎。料紙、椿。印記「内閣図書之印」「日本政府図書」「内閣文庫」「昌平坂」。

昌平坂学問所旧蔵本は、三二卷一六冊、一冊に二卷ずつ収録されており、各冊の末尾には校合識語が見られる。第一冊の末尾には、次のようにある。

関ヶ原軍記大全卷之二 終

乙未十有二月初四

対校 中村和篤

海老原利濟

「対校」の下の氏名は各冊二名ずつ書かれており、中村和篤、海老原利濟の他、伊藤篤敬、室本俊方、村井量令、内藤由章、葦名盛正、仲田惟善、大橋秀實、内海範儀の名前が認められた。ここから、昌平坂学問所旧蔵本『関ヶ原軍記大全』は、この一〇人によって対校されたことが知られる。このうち、村井量令は『国書人名辞典』に、次のような記載が見られる。

村井量令 むらいかずのり

幕臣「生没」生没年未詳。江戸時代後期の人。「名号」名、量令。通称、専之助。号、一甫。「経歴」戸田氏徳らと^①昌平坂学問所が収集した典籍や記録を分類・解題し、資料の編集に携わった。

傍線部①にあるように、村井量令は、文政九年（一八二六）に『番外雑書解題』、文政一〇年（一八二七）に『群書備考』、文政一年（一八二八）に『記録解題』の編集に携わっている。また、村井量令の他にも、内海範儀、海老原利濟の名が、昌平坂学問所内の記録所において嘉永六年（一八五三）に編纂された『通航一覽』（内閣文庫蔵）に見られる。したがって、『関ヶ原軍記大全』を対校した一〇人は、昌平坂学問所において、収集された記録を整理する仕事に従事した学者であろう。彼等の活動時期に照らすと、対校年の「乙未」は天保六年（一八三五）であることがわかった。また、『関ヶ原軍記大全』は、昌平坂学問所によって収集され、学者らによって対校された書籍の一つであることから、少なくとも全く無名の作品ではなかったと言える。『関ヶ原軍記大全』は刊行されず、写本のみで流通していたが、書写当時の天保六年には、昌平坂学問所がそ

の存在を無視できないほどに、一定数の読者を得ていたのである。

次に、本書の成立について考察する。昌平坂学問所旧蔵本『関ヶ原軍記大全』の序文を以下に掲げる。

夫関ヶ原の乱を相考ふるに、近江国佐和山城主、石田治部少輔三成、并与力の諸大名滅亡于時、人皇百八代後陽成院の御宇、^②慶長五年庚子九月十五日也。凡至^③今百貳拾年。^④抑、石田治部少輔三成が逆意如何と相尋るに、彼三成太閤秀吉の寵臣にして、忠誠なきにしもあらず。雖然、才智勝れて又驕強く、久舖五奉行の随一にして、威風和漢に顕然たり。依て幼主秀頼を挾て、己權威を握りて宿意を達せんと、諸国の大小名を誦らひ催して 内府公を打奉らんとす。 東照宮奇妙の御名將にして、関ヶ原の御一戦、忽御勝利にして万民枕を泰山の安きに置て、其間に品々の御謀略辛戦、まち／＼にして、略説繁多なり。仍て其根元を糺し極て、大全と号する者なり。

勢州の国司北畠の庶流 田丸常山述之（花押）

傍線部②のように、慶長五年（一六〇〇）の関ヶ原の戦いから約一二〇年であれば、享保五年（一七二〇）前後に書かれたということになる。また、作者の田丸常山は、天草軍記物の実録体小説の作者としても知られ、菊池氏によれば^⑤、田丸常山が成立に関わった『天草軍談』は、元文から延享（一七三六―一七四八）ごろの成立と見られるという。『関ヶ原軍記大全』の成立を享保五年あたりとすれば、田丸常山の活動時期と大きく外れるものではない。

ところで、早稲田大学図書館所蔵『関ヶ原軍記大全』の序文は、昌平坂学問所旧蔵本とほぼ同文ながら小異を含むので、左に引用し

ておこう。

夫関ヶ原の乱を見るに、近江国佐和山の城主、石田治部少輔三成に与力の諸大名滅亡の時は、人皇百八代後陽成院の御宇、^③慶長五庚子年九月十五日なり。凡そ今にいたるまで百弍拾参年、石田三成が逆意の根元をいかにとつぬるに、三成は大閤の寵臣にして、忠義無きしにもあらず。しかりといへ共、才智すぐれて又奢りつよく、久敷五奉行の随一にして、威风和漢に秀でたり。よつて幼主秀頼をさしはさんで、おのれ權勢を握り宿意を達せんと、諸国の大小名をかりもよふし、調略をなして内府公を討奉らんとす。しかるに、東照宮は神妙成る御名將にましゝて、関ヶ原の戦かひも、忽まちに御勝利と成て、万民を泰山の安きに置き給ふ。そのあいだに、しなゝの御謀略辛戦等、區々なり。尤も、略説繁多なり。去れば其根元をたゞしぬいて、大全とぞするものなり。

④ 天明元年六月
田丸常山述之

傍線部③には、昌平坂学問所旧蔵本序文の傍線部②と同様、関ヶ原の戦いから約一二〇年という文言があるが、早稲田大学図書館本序文末尾には、傍線部④「天明元年六月」と記載されている。しかし、天明元年（一七八一）は、関ヶ原の戦いから一八一年目に当たり、「凡そ今にいたるまで百弍拾余年」とは言えない。ここでの田丸常山は作者ではなく、『関ヶ原軍記大全』を書き写した人物ということになるか。昌平坂学問所旧蔵本に言う「勢州の国司北島の庶流」との記述も、早稲田大学図書館本にはない。もつとも、中村幸彦氏が指摘されたように¹⁾、実録体小説の序跋にはさかしらが

多く、その年次を鵜呑みにすることはできない。また、「天明元年」だけでなく、そもそも序文の「凡至今百弍拾年」が事実と異なるという可能性もあり、享保五年前後成立とも断定できない。ただし、実際よりも新しい年代を書くとは考えにくいため、早稲田大学図書館本の序文に記された年次「天明元年」を『関ヶ原軍記大全』の成立の下限とし、『関ヶ原軍記大全』の成立を一八世紀半ばと考えると、以下、論を進める。

二

『関ヶ原軍記大成』は、『関ヶ原軍記大全』と書名は似ているが、先行する別作品である。その概要について、『日本古典文学大辞典』の記述を引用する。

関ヶ原軍記大成せきはらくんきたいせい

四十五卷二十三冊（冊数不定）。軍記。宮川忍齋編。正徳三年（一七一三）竹田春庵（定直）序、同年自序。凡例。正徳六年榊田琴山（涉）序。正徳三年児島常耕斎（景范）跋、同年寫本晚翠（牧）跋（写本により序跋の数に相違がある）。正徳三年成立。写本で伝わった。

本章では、『関ヶ原軍記大成』を比較軸として用いることで、『関ヶ原軍記大全』の特徴を捉えることを試みたい。以下に、『関ヶ原軍記大成』の凡例の一部を引用する。

一、此大乱に、諸將の軍功軽重ありと聞きし故、其実説を聞かまほしさに、延宝乙卯より、正徳癸巳の此春まで、凡そ二十八年が程、国々のつでを求めて、間に遣はし侍るに、或は其戦

功を、有の儘に答へ、あるは功名を補ひ飾り、又は憚ありとて終に答へざるもあり。其答へざるに至りては、いかんともすべき様なし。是によりて、伝記に出でたる説々と、老人の語り伝へを挙げて、爰に記す。

一、誠しき説々は、善悪知り難きにより、其諸説を列べ記して、あやしの誤説は、人の惑なるべきを憚りて、爰に記さず。かへりて所々に、此辯論をなせり。

『関ヶ原軍記大成』の著者宮川忍斎は、右において、「実説」を追究すべく、関ヶ原の戦いに纏わる話を各地から集め、誤説が混じらぬよう注意を払いながら『関ヶ原軍記大成』を記したと述べている。『関ヶ原軍記大成』の内容がどこまで「実説」なのか、その信憑性の程度はにわかに推し量りたいが、少なくとも著者忍斎が「実説」追究の姿勢をとると明言していることに注意を払っておきたい。

さて、その『関ヶ原軍記大成』（以下、本章中では『大成』と略称）と『関ヶ原軍記大全』（以下『大全』）の内容は、どのように重なり、あるいは、どのように異なっているだろうか。巻末の【表】は、関ヶ原の戦いに至る経緯とその戦後処理までの出来事を概ね時系列に並べ、『大全』と『大成』の、それぞれ何巻の何番目にその出来事が描かれているかを纏めたものである。これを見ると、『大全』『大成』共に、ほぼ時系列に沿って描かれていることがわかる。しかし、一方では描かれ、他方では描かれていない出来事も多数存在する。

まず、『大成』にあつて『大全』にはない話に着目する。凡例で宣言しているように、『大成』は関ヶ原の戦いに纏わる様々な話を

載せており、それは本戦に先立つ前哨戦や、地方での戦いの数々も例外ではない。『大成』に比べ、『大全』はそのような本戦以外の合戦の場면을省略する傾向がある。【表】の▼から▲が前哨戦、▽から△が地方の戦いを示しており、それらは関ヶ原の戦いの一部であるにも拘わらず、『大全』では描かれていないものが多い。このことから、『大成』は『大成』と異なり、関ヶ原の戦いに関わる全ての事柄を漏らさず記述しようという意図はないことがわかる。

次に、『大全』にあつて『大成』にない話を見ていこう。【表】では、『大成』にのみ載せられ、『大成』では全く触れられていない話を太字で示しており、その太字は全体の序盤に多いことが見てとれる。それらのうち、『大全』巻之二の「石田謀略 家康公利家不和 附三成長政九州下向 并朝鮮にて加藤清正武勇の事」の一節を用いてみよう。この場面は豊臣秀吉死去のすぐあとに載せられており、ここで石田三成は徳川家康と前田利家を不和にする策略を立てる。【表】では●の列にある。

石田治部少輔三成は深く思慮を廻らすと雖、其心底に「太閤逝去後追日 内府公の御威光高く、此俟に年月を送らば、秀頼公相立ずして天下は 内府公の物となるべし」とおもひければ、今此内に思慮を廻らし、我恚人の功を立てしと心中におもひ廻けり。然に、「加賀大納言利家は武勇といひ、殊に老年なれば、何様関東と互角の戦すべきなり。此両家争時には強きは疵付、よわきは亡ん。其虚に乗て、討果事も安かるべし」とて、

『大全』での三成は、秀吉の死去の後、天下が豊臣秀頼ではなく家康のものとなることを危惧し、早い段階から家康を陥れるため謀

略を廻らしている。対する『大成』で三成が家康排除に向けて動くのは、他の大名家と婚姻関係を結ぶ家康に対し、五大老の他の四人と五奉行が結束して抗議する巻之二が最初である。

同じく『大全』でのみ語られる三成の家康排除の動きを、巻之四「大納言利家病死 并石田治部少輔三成難儀危急之事」から挙げる。病氣となった利家を見舞いに来た家康に、利家の館で三成が毒を盛ろうとする場面である。表では■に当たる。

此節治部少輔は怖敷ものにて、とかく 内府公を失ひ奉らんと
の工風にて、秀頼の使節と偽り推参して申上げるは 内府
公はるゝの御来駕御大義に思召されて御辛勞を尋給ふ。是に
仍て 内府公大納言殿両将へ御茶を被進、秀頼卿より饗応の
旨を相延る。利家は有難しと相受せらるゝ。 家康公ははや

くも御推量有て、是必定毒味也と思召ければ、
『大全』の三成は、秀頼の使者と偽り、利家の目の前で、自らの手で家康を毒殺しようとするなど、明らかに創作と思えるような手段で執拗に家康の命を狙う。これに対して『大成』の三成は、積極的に行動を起こしてはおらず、網羅的に記述される出来事の中に登場する大勢のうちの一人ではかない。

ここで、前章で引用した昌平坂学問所旧蔵本『大全』の序文を振り返ってみたい。傍線部⑤に「抑、石田治部少輔三成が逆意如何と相尋るに」とあり、これを導入として概略の説明を始めていることから、『大全』には、家康対三成という視点で関ヶ原の戦いを語る姿勢が存在していると言える。出来事を描く『大成』に対し、『大全』は人物を中心に描き、中でも家康と三成の攻防を軸として物語が進む。つまり、『大成』は実説を求めて、諸説を検証しながら網

羅的に出来事を記述するのに対し、『大全』は人物を軸として関ヶ原の戦いを描こうとしているのである。

三

『関ヶ原軍記大全』が徳川家康と石田三成の戦いを中心として描いていることは、巻之一の前半「関ヶ原合戦発端の事」の冒頭からもうかがえる。

⑤東照宮は岡崎より出給ひ、三遠両国を平均し給ひ、諸国に辛勞百拾余度にして天下治り、四海万歳を唱へ、百年以来戸さ、ぬ御代となりしは、偏に 東照宮の御武徳によるものなり。心あらん人は毎月十七日には忍精進して、年に一度の御祭りには尊敬すべきの事なり。當時日本国中神社佛閣の式礼或は武家の法令等、是皆関ヶ原御陣以後に相定れり。然るに、此度関ヶ原合戦は、未太閤の曙覚めずして大坂の下知を守る人多く、又石田三成御敵なれ共、謀略深く彼是調略しける故、天下は糸筋のごとく乱て、東西南北に別れて、一統し難き折柄、彼是辛勞苦戦、御一代に一度の御苦勞震ひかかつて、東西混乱する処を一統する根元なれば、是偏に凡人の及ぶ処にあらず。

東照宮の御太功也。

『関ヶ原軍記大全』において、傍線部⑥のように、家康は東照宮として設定されており、その勝利は確定している。家康を生前の場面であっても「東照宮」や「神君」等と崇める書き方は、江戸時代に成立した軍書類の定型であり、『関ヶ原軍記大全』もこれをふまえている。しかし、結末が約束されていないながら、本編において家

康は何度も危うい目に遭い、その度に辛くも逃れることを繰り返す。先に見た三成による家康毒殺未遂などの、明らかに創作と思われる家康の危機もこれに当たると。結末を約束した上で、そこに到るまでの苦難を追加しているのである。むしろ、家康を巻之一の段階で「東照宮」と呼んでいるのは、今後どんな展開があろうとも、最後には家康が勝つことを示すためでもあるのではないだろうか。『関ヶ原軍記大全』は家康の「東照宮」設定を、軍書の定型としてだけではなく、物語の着地点を保証する機能として用い、家康に様々な困難を与えることを可能にしたと言える。そして、その困難を家康が乗り越えるという繰り返しによって、話が展開されていく。

ここで、『関ヶ原軍記大全』の最終巻、巻之三拾二「井伊兵部少輔直政病死遺言 附 家康公御隠居 并秀忠公將軍宣下之事」の最後の場面を見てみよう。関ヶ原の戦いに参加した大名家の顛末の話題が終わり、慶長十年以降の徳川家について語られる。

慶長十年 家康公被仰出けるは、「我世上を按ずるに、実是有為転変也。幼年の時より弓矢を取て相働く。一生の内、大敵と戦ひ勝敗まち／＼にして、幸に長命して我壺人残り、今天下六十余州を握りて天下の守也。又、諸士又相連りて官位は從一位右大臣征夷大將軍、寿は六十五歳也。何と不足なし。然る上は古語にいふごとく功成名掛て退くは天の道也。秀忠壯年也。既に此儀被仰出、御讓職有べきとの御事也。(中略)家康公御隠居有て、天下江御触諸法度被行、天下万歳を唱ふ。此悅限なし。かくて慶長十年四月十六日 秀忠公御參内從一位内大臣征夷大將軍に宣下し給ふ。御代万々歳。

三二巻に渡る『関ヶ原軍記大全』は、関ヶ原の戦いから五年後の、家康の隠居と息子秀忠の將軍職就任で終わる。そして、傍線部⑧「御代万々歳」において、物語冒頭の傍線部⑦と同じ、現在の東照宮に対する礼讃に戻る。つまり、物語の着地点として保証された場所へ帰るのである。『関ヶ原軍記大全』は、語られる作中世界と読者の存在する現在、ひいては現実が家康を通じて繋がっていると言える。家康は、『関ヶ原軍記大全』が現実からかけ離れすぎたまわぬように、枠組みを設定する機能を持つ。

次に、三成の描写について見ていこう。三成の出自については、巻之一「石田治部少輔三成出緒 付利家 内府公と障 并藤堂佐渡守高虎朝鮮在陣の兵士を引揚事」に、以下のように記述されている。

石田治部少輔三成が先祖は藤原氏にて、大職冠鎌足の長男從二位右大臣淡海公の末葉、石田判官為成が子孫也。(中略)八代の内土民と成り下りしを、石田為成が後胤にして石田左近右衛門、三成が父なり。然るに此左近右衛門は家富榮へけれども男子なし。依て同州長国守の観音に祈念して、妻懐胎す。此子男子なるらん事を願ひ、且、武勇智謀の秀る事を祈るに、毎夜夫の衣服を着して大小を帯し、夜々井水にて水鏡を見て「懐胎の子男子にて、心広く秀よかし」と誓ひを立たり。「たとへ此身は終るとも、此子の武名輝くやうに」と祈念する事一心不乱なりしか、既に月充産に臨む時、大きに苦しみ難産也。然れども男子なり。母は此節に死す。其後此所に一宮を建立して明光寺といふて、観音を安置し、母のほだひを弔けり。かくて出生の男子は左吉と名付て寵愛しけり。利発にて諸人に勝れ、殊に

美麗なり。

『関ヶ原軍記大全』では、三成について、傍線部⑨のように、男児が生れなかつたために観音に祈願して生まれたという申し子譚が語られている。三成の出自の記述は、関ヶ原の戦いを描いた他の作品でも見られるが、三成には実兄がおり、この申し子譚は『関ヶ原軍記大全』以外には管見の限り見当たらない。『関ヶ原軍記大全』は、家族構成を変更してまで、三成に物語の主人公の型である申し子設定を付与している。ただし、申し子ではあるが、中世の本地物とは異なり、三成が神仏に化すことはない。申し子という型だけを語りに利用しているのである。

『関ヶ原軍記大全』の語りは、家康を「東照宮」として固定し、家康が窮地に立たされる展開を繰り返す。その家康を追い込む役割を担うのは、三成であった。家康を示す「東照宮」は、作品の着地点が「実」と同じであることの保証であり、制約とも言える。その家康に対して、家康を執拗に狙う三成は明らかに創作と思えるような行動も辞さない。「申し子」という物語的な「虚」の設定を付与されている三成は、「実」の制約を受ける家康とは異なり、自由に物語を動かすことができたのである。

四

次に、三成と家康以外の登場人物を見ていく。関ヶ原の戦いの本戦は、巻之一九から二四までの五巻を使って語られており、言うまでもなく『関ヶ原軍記大全』の最重要場面である。本戦の模様を描かれる順序に従って簡条書きに挙げると、以下のようになる。

・福島隊(家康方)と浮多隊(三成方)の戦い【巻之一九・二話目】

・嶋隊(三成方)と京極隊・桑山隊・藤堂隊等(家康方)との戦い【巻之二〇・一話目】

い【巻之二〇・一話目】

・大谷隊(三成方)と小早川隊(家康方)の戦い【巻之二〇・二話目】

・石田隊と本多隊(家康方)の戦い【巻之二一・二話目】

・三成方全体の様子【巻之二一・二話目】

・嶋隊(三成方)と細川隊(家康方)との戦い【巻之二二・二話目】

二・一話目】

・黒田隊・山内隊(家康方)と小西隊(三成方)との戦い【巻之二三・一話目】

・島津隊(三成方)と加藤隊・井伊隊・松平隊(家康方)との戦い【巻之二三・二話目】

い【巻之二三・二話目】

・島津隊(三成方)の撤退【巻之二四・一話目】

概ね時系列に沿って語られるが、時間よりも、話題を対戦ごとに分けることが優先される。ただし、敵味方の交戦における武将の活躍だけでなく、味方同士繋がり描写にも多くの頁が割かれている。それではまず、主君と家臣という関係の人物たちに着目する。

巻之廿一「大谷刑部少輔吉隆自害附湯浅五助最期 并大学頭落方小西合戦之事」の西軍の大谷吉隆と湯浅五助主従について見ていこう。

主君・吉隆が自刃した後、家臣・五助は遺言に従い吉隆の首を隠すが、東軍の藤堂仁右衛門に見つかってしまう。五助が自分の首と引き換えに、吉隆の首を探さないよう仁右衛門に交渉する場面から引用する。

湯浅は此時に持たる鐘をはなし、我が太刀をも投出し「いかに

や若者よ、今は是迄なり。我首取て高名にせよ。大谷刑部少輔が家人湯浅五助といふもの也。内府公にも御存知の者なり。扨又武門の儀なり。吉隆の首は深く隠す子細あり。ひとへに貴殿をたのむなり。然所に主人の首を隠す事、穩便に頼や。是又吉隆遺言なれば是非に不及也。是非に頼なり」と理を尽して申けり。仁右衛門は大剛の心にて一筋成る武勇人なれば、何とやらん哀れになり、承届たり。「いかにも貴殿の頼のごとく、吉隆の首はかくし遂、又甲をすべきなり」と慥かに請合たり。五助聞て大きに悦び、さらばとて既に自害せんとしけるに、仁右衛門聲かけて「いや〜五助、冷首は取まじ。太刀討して勝負せよ」と呼ばりけり。此節五助は仁右衛門を誉て「流石に武者なり。若もの、望み、いで〜心得たり」とて立寄て二打三打ち合。

仁右衛門は交渉を受け入れる。五助は喜んで自刃しようとするが、戦つて首を取ることを仁右衛門が願つたため、二人は一騎打ちをする。仁右衛門は五助の首を取り、約束通り、吉隆の首を家康に差し出すことはなかった。既に死んだ主君のために命を惜しまない五助と、その覚悟を理解する仁右衛門のやりとりが描かれ、実利や損得の絡まない忠義がこの場面での主題となる。

次に、巻之廿四「島津中務大輔家久打死 并兵庫頭落足之事」の島津隊を見る。東軍の勝利が決定し、島津隊は撤退する。島津義弘を逃すため、島津中務は自分が残つて敵兵を喰ひ止める計画を義弘に提案するが、猛反発されてしまう。その義弘に対する中務の反論から引用する。

此時中務大音あげて「あら笑止や。運の極の大将は此乱軍に向

へ迷ひ、是非を辯へ給ぬぞや。昔、義経の身代りに吉野に於て佐藤四郎兵衛忠信、忝人踏止りて敵を防て大将を落す。是全く義経恥辱にあらず。又島津家は頼朝公より五百年來相統するに、嫡子にて家を継。よつて、何卒嫡子にて相統有様におもへば、てんはかくのごとく也。主君の為に打死する臣の身とて珍らしからず。然んを今の如くに宣ふは、但し兵庫頭は心弱く腰抜けて、今此大敵を恐れ一人にて切抜、本国へ帰る事心元なく思ひ、中務に離る、事を迷惑して、ひとへに某が武勇を慕ひ給ふや」と大きに恥しめたり。是全く主君の心底に腹立させ、退かすべきの為なり。

多大な犠牲を払つても、大将・義弘を本国へ帰そうとする中務の提案を、義弘は怒りを露わにして退け、自身も討死を望む。中務は義弘をあえてさらに怒らせて説得を試み、その中で傍線部①のように、嫡子が家督を相続すべきである旨を述べる。先ほど見た大谷吉隆・湯浅五助主従の忠義は、吉隆への五助個人の話であつたのに対し、ここでは、家の相続のことが話題となる。『関ヶ原軍記大全』において島津家の嫡子と設定されている義弘が、生き残つて嫡子としての務めを果たすべきだという名分論がこの場面での主題となつており、大谷吉隆・湯浅五助主従とは論点が異なっている。

これら二組とは全く異なつた主従もいる。巻之式拾二「嶋左近落着 并小西行長と黒田細川合戦之事」の石田三成と嶋左近である。討死覚悟で細川隊と戦つていた左近であるが、あまりに強かつたために、細川隊は左近に構わず三成に標的を絞る。敵がいなくなつた左近は、三成を助けず故郷の対馬へ帰つていく。

嶋左近は此節向ふ敵忝人もなく、前後左右に雷動する。然る

に、合戦の様子を見切、独言して「我誤て石田が家人と成て一生の武名を水にしたり。始終戦の図を外し、我がいふ謀略に不随してかくのごとき軍なり。今ははや何様に思ふとも合戦成べからず。南宮山の味方は旗色変じたり。既に諸方の戦ひ頓て敗軍すべき也。又我打死にすべきと思へども、敵するものなし。是非に不及」と、敵味方の乗捨たる足強なる馬を見立て打乗り、しづかに海道を退く。嶋左近が命の定業いまだ来らず哉。又は武勇の勝れたる故に哉。唯壱人慕ひ留るものなければ、本国対馬江下りけり。

(中略) 然るに、或人島左近は戦場を遁れて主人の守途を見届けずして、死後遁れたりと笑ふ人あり。尤も忠節の臣として主人を捨べき事にあらずといへども、是は宗廟の臣とは違ふ事なり。尤古来合戦場に相手なくして通るく者は左近計にも不^⑩限、いにしへ元弘建武の比、北條高時の臣に長崎勘ヶ由左衛門為基、又新田義貞の臣に篠塚伊賀守、其敵なき故、其落方を知らず。又朝比奈三郎義秀、和田合戦の時、稲村ヶ崎合逐電しけるに敵なし。是等の輩は皆々武勇の秀たる人となり、雑人がさみすべき哉。然らば島左近比興にして道を知らずと云へらず。武勇の達人なり。

先の二例では、自身の命を捨てて主君に尽くした将が描かれていたが、左近は主君三成を見捨ててしまふ。ただし、語り手が左近を責めることはない。むしろ左近への不名誉な評価に対し、傍線部⑫で、過去の名将という具体例を使って擁護する。臣下の例として歴史上の人物の名前を出す点においては、先ほどの中務の、傍線部⑩の佐藤忠信の例と同じである。しかし、ここで問題となっているの

は、忠義や名分論などではなく、左近個人の武勇である。家臣としての人物を描いていても、君臣論といったような主君との関係ではなく、あくまでその人物個人の性質が問題とされている。ここから、主君と家臣のあるべき姿を明らかにしたような、主従関係自体を問題としているのではなく、ある人物を取り巻く人間関係によつて、その人物の性質を描くことが目的と言える。主従関係を始めとする登場人物同士の結びつきから垣間見える性格、人柄は、単独での活躍の描写だけでは描き切れなかつたであろう。

五

『関ヶ原軍記大全』は、読者にとつて周知の事実である戦いの勝敗よりも、その戦いの中での登場人物の行動、ひいては生き方を描くことに重点を置く。しかし、登場人物たちをいくらか特徴付けようとも、戦いで活躍する人物は概ね「勇猛」や「剛勇」と言つた言葉で表され、ともすれば似通つた性質となつてしまふ。語り手は、単独の人物に特徴を付けるのみならず、人物同士の結びつき方に特色を持たせることで、その関係性からうかがえる人物の性格を、より人間的で、活き活きとしたものとして描くことに成功した。

この例外として徳川家康は、他の登場人物とは一線を画す。家康は「東照宮」、つまりは神であるために、人智を超えた人物として描かれ、人間らしさからは離れてしまつてゐる。家康は、作中の関ヶ原の戦いが、実際に一六〇〇年に起つた、つまりは「実」の関ヶ原の戦いと同一であることを示し、作中世界と現実世界とを繋げる役割を持つ。したがつて、家康は物語の枠組みであり、自身は

物語の中で動くことができない。その枠の中で自由に動く人物の代表が、申し子という物語的設定、つまりは「虚」の要素を持つ石田三成なのである。この家康と三成の攻防が『関ヶ原軍記大全』の進行の主軸を担い、その中で数々の登場人物が描かれる。この、人物を描くということこそが、『関ヶ原軍記大全』の語りが目指した、作品全体の主題である。

「実」と近い場所に位置する「虚」は、史実とは異なる歴史を伝えてしまうという面を持つ。そうして伝わった逸話は、「あの有名なエピソードは嘘だった」などとして、時に扇情的に取り上げられる。しかし、現代でも広く知られたエピソードとなるまでに成長した逸話が、「虚」であるという点だけで、全くの無価値になるとは思えない。文学研究は、その文学的価値に目を向けることができるのである。この「虚」を見直す上で、実録体小説は恰好の素材である。

本来であれば、異本調査や成立、筆写年代の整理といった、膨大な時間を要する諸本研究が必要であるが、本論文ではそれらを省略して内容の研究を行った。成立時の状況や先行作品からの影響を明らかにできれば、内容についてもより深い考察に踏み込めたことは自明であり、今後の課題として残されている。

【表】凡例

- ・年月日は出来事の前後関係の整理を目的とする。よって、『大全』『大成』における日付の相違は問題としない。
- ・出来事の項目は、『大全』『大成』に準じて私に作成した。
- ・太字は、『大成』になく『大全』のみに見られる出来事を示す。
- ・「①②」は巻之一の二話目に収録されていることを示す。
- ・左端の記号は行論の都合上、付したものである。

【表】『関ヶ原軍記大成』『関ヶ原軍記大全』対照表

年月日	出来事	大全	大成	
1598年5月～8月18日	豊臣秀吉発病～死去	1①	1①	
11月	朝鮮在陣の兵の引揚	石田三成 ¹ の作戦により家康・利家不和	1② 2①	×
		加藤清正の活躍により無事撤収	2②	×
1599年1月10日	秀頼大坂城入城	豊臣秀頼、伏見城から大坂城へ移る	3①	1③
1月12日		徳川家康、大坂の追手から逃げ切り伏見へ帰還	3②	2①
1月19日	五奉行による家康詰問	抗議を受けた家康、伏見を脱出する	4①	2②
2月5日		家康、五奉行らと和解	4②	2②
2月29日		前田利家、家康を訪ねる	4③	2③
3月1日	利家死去	家康、利家を訪ねる。三成、家康を毒殺未遂	4④	2④
3月3日		利家死去		
3月4日	七将三成襲撃	七将に襲撃された三成、家康宅へ	5①	3①
3月10日		三成佐和山城蟄居	5②	3①
3月13日		家康伏見入城	5③	3②
9月9日	大坂城で家康閣討未遂	浅野ら、家康閣討を画策	6①	4①
10月2日		家康、浅野らを処分する	6②	4②
10月3日		利長、家康閣討疑惑を掛けられるも和陸成立	6③	4③
		本多忠勝、佐和山城を偵察	7①	×
11月	上杉家	上杉、要害を築く	7①	
4月14日		直江状	7②	5①
6月15日～7月3日	家康、上杉討伐に向けて動く	家康、関東へ	8①	5③ 6①
6月18日		家康、鳥居元忠に伏見城を任せる		6②
6月18日		家康、石部で追手から逃げ切る	8②	×
7月11日		大谷吉継(吉隆)、三成に組する	9②	9①
7月12日	三成、拳兵	西軍評定	9③	9②
7月16日		人質の収容。細川ガラシャ死亡	10①	9③④ 10①
7月19日	東軍の動き	加賀井弥八郎、水野忠重を殺害	9①	9①
7月19日～8月1日		西軍による伏見城攻	10①② 11①	10②
7月19日～9月6日		西軍による田辺城(丹後)	11②	11
7月21日		家康、江戸城を立つ	13①	8③
7月25日	小山評定			
8月3日	北陸	大聖寺の戦い	12①②	12①
8月9日		浅井暁の戦い	12①	13①②③
8月12日	岐阜城攻略	東軍による岩村城攻(美濃)	×	
8月16日		東軍による苗木城攻(美濃)	×	14③
8月16日		東軍による福東城攻(美濃)	×	
8月19日		東軍による高巢城攻(美濃)	×	14②
8月22日		河田木曾川渡河の戦い、米野の戦い	15①②	16②
8月22日		竹ヶ鼻城の戦い	16①	17①
8月23日		東軍による岐阜城攻	16①②	17②
8月23日		江渡川の戦い	17①②	18①
8月24日～8月25日	西軍による阿濃津城攻(伊勢)	×	15①②	
9月1日～9月4日	東軍による八幡城攻(美濃)	×	21②	
9月4日～9月9日	東軍による上田城攻(信濃)	25② 26①②	21①	
9月8日～9月14日	西軍による大津城攻(近江)	×	22 23①	
9月14日	関ヶ原の戦い	杭瀬川の戦い(笠縫堤合戦)	18②	20①
9月15日			19①～24①	24①～27①
1600年7月	東北	東軍による白石城攻め	×	8①②
9月13日		西軍による畑谷堂城攻め	×	33②
9月15日～29日		西軍による長谷堂城攻め	×	33③④
		東軍による東禅寺城攻め	×	34①
9月29日～10月7日	九州	伊達政宗による上杉領攻め	×	44①②③
9月10日		東軍による富來城・安岐城攻	×	36 39①②
9月13日、14日		石垣原の戦い	×	37 38
9月21日～10月14日		東軍による宇土城攻	×	40②
9月29日		東軍による宮崎城攻	×	40①
10月10日		東軍による小倉城	×	41①
10月20日～25日	東軍による柳河城攻	×	41②③	
9月17日	佐和山城攻	25①②	30①	
9月17日～24日	四国	西軍による伊予侵攻	×	35①②
9月21日		三成捕縛	27①	30②
10月1日	戦後処理	三成・行長・惠瓊ら処刑	30②	43②
		小早川	31①	31①
		宇喜多	27② 28①	43①
		福島	28② 29①	31②
		島津	28①	42①
1605年4月16日	秀忠將軍宣下	32②	×	

【注】

- (1) 吉川弘文館、二〇一七年。
- (2) 『近世実録の研究―成立と展開―』「はじめに」(汲古書院、二〇〇八年)。
- (3) 前掲注(2) 『近世実録の研究―成立と展開―』「成長初期から虚構確立期まで―「天草軍記物」を例に―」参照。
- (4) 『中村幸彦著述集 第十卷 舌耕文学談』「実録、講談について」(中央公論社、一九八三年) 参照。

〔付記〕 本稿は、第四三回山口大学人文学部国語国文学会における
同題の口頭発表に基づく。席上ご教示を賜りました諸先生方に感謝
申しあげます。

(おのぞら・ひかり)